

ジモト  
で 宮城県版  
はたららく

平成30年3月発行

## 地元就職のススメ

地元で就職するか地元以外で就職するか。

それは就職を考える時に頭を悩ませることの一つ。

実は地元には、あまりよく知られていないものの、

地元ならではの魅力的な企業がまだまだたくさんある。

そんな地元企業に就職し、実際に働いている先輩たちの

日々の仕事の様子や地元で働く魅力を紹介。

「地元就職」について考えてほしい。



地元就職のススメ .....	2
<b>漁業者の元気が、まちの元気 好循環を生み出す原動力になりたい！</b> .....	4
及川 洋也さん アサヤ株式会社 営業担当 2012年入社	
<b>頭の中で動かした通りに 機械が動く爽快感が最高</b> .....	8
柴田 学さん 株式会社岩沼精工 設計担当 2007年入社	
<b>美しい風景と豊かな食文化 大好きなふるさとで生きて行く</b> .....	
※申し出によりこのページは削除されました。	
Interview	
<b>地元の良さを知ろう</b> .....	16
鈴木 歩さん ペンシーネクストスイッチ 代表CEO	
<b>都会と地方の違い</b> .....	20
吉田 浩 東北大学大学院 経済学研究科 教授	
<b>被災3県の高校生・大学生の就職に関するアンケート 数字で見る3県の特徴</b> .....	21
<b>地元企業に目を向けよう</b> .....	23



# 漁業者の元気が、まちの元気 好循環を生み出す原動力になりたい！



おいかわひろや  
**及川 洋也さん**

アサヤ株式会社

営業担当 2012年入社

本吉郡南三陸町出身 30歳

ホタテ養殖で使う機械を積み込む。

**漁業者に寄り添い続けて168年  
現在6代目の老舗企業**

古くから世界屈指の豊かな漁場として知られる「三陸」。その漁に欠かせない漁具を扱う気仙沼発の漁具屋として、1850年（嘉永3年）に創業したのが「廣野屋（現アサヤ株式会社）」だ。53年にべりーの黒

船来航と言えば、その歴史の重みがかかるだろう。

三陸全域を商圏とし、「漁民の利益につながる、よい漁具を」との創業理念を受け継ぎ、現在同社は、廣野浩代表取締役社長で6代目。養殖、定置網、遠洋漁業の個人から企業まで漁業に必要な機械や資材などを提供し、幅広い漁業関係者に「アサヤ

さん、なんとがしてけんねが」と頼られる存在だ。

現在入社6年目の及川洋也さん。東日本大震災後に同社でアルバイトをしたことが入社のみきっかけとなった。当時、気仙沼をはじめ三陸沿岸は津波によって壊滅状態。多くの漁業者が家族や住まい、漁船、養殖棚などを奪われたが、1週間も経たないうちに「震災にまけられない！」との思いで漁業者が立ち上がったことから、同社にも注文が相次いだ。自らも被災した中だったが、漁業者の熱い思いに応えようと、早朝から夜遅くまで全国から資材をかき集めて、納品する日々だった。「親しくしている人たちが大変な状況にあるのを見て、一日も早く操業できるように手助けをしなければと思いました」。

**待っていてくれる人がいる  
だから仕事は楽しい**

現在、及川さんは南三陸町の実家から1時間ほどかけて通勤している。仕事は、営業。気仙沼市のホタテ養殖を行う漁業者を担当し、漁業資材の注文を受け、納品する。震災

前に盛んだった力キ養殖から、通年需要が見込めるホタテ養殖に切り替える漁業者も多く、同社でもホタテ養殖向けの資材は大きなシェアを占めている。

ここでは、まずお客さんと人間関係を築くことが大切だという。世間話を花を咲かせるのも仕事のひとつだ。いつもニコニコ話を聞く及川さんは、浜の人気者でもある。帰りには、水揚げされた魚や、まんじゅうなどをいただくことも多く、「孫や子どものように接してもらっています」「うれしいぞう。社内でも」



お客様からの相談を持ち帰り、社内で打合せ。

ロヤ」「ヒロヤ君」と呼ばれ、誰からも愛される存在だ。

及川さんも「アサヤは、みんな明るく、ざっくばらんで人柄がいいんです」と風通しのいい社内の雰囲気自慢だ。就業時間が終わっても、会社の前でみんなでサッカーをしたり、野球をしたり、用事がなくても去りがたく、雑談してから帰宅するのが常だという。

### 今も受け継がれる

### 「三方よし」のスピリット

及川さんが仕事をする上で心がけているのは、「こやかさ」「表情筋を柔らかくして、にこっこ。そうするとみんな安心して話かけてくれますからな」。

そんなムードメーカーの及川さんの今後の目標は、まずは漁業者のみなさんに良くなってもらうこと。「そのために、ほかの地域で成功した養殖の方法や、資材の新製品の情報などを素早く伝えて、役立ててほしいです」。これからも漁業者に寄り添いながら、自らもさらに成長することを心に誓っている。



## 及川さんのある日の一日

8:00 朝礼・ミーティング

8:40 納品書作成・納品物品の積み込み

9:00 外回りに出発

9:30 納品・集金  
お客様を訪問し、世間話をしながら困り事や必要なものがないか情報収集する。

12:00 昼食  
お客様の家でこちそうになることもある。

13:00 緊急対応  
「機械の調子を見てほしい」とお客様から電話を受け駆け付ける。新しい機械を提案し、注文をいただく。

16:00 帰社  
会社に戻りデスクワーク。

17:00 終業

### 上司に聞く

#### 話上手より、聞き上手 「信頼」を築くことが第一歩

アサヤの営業で最も大事なものは、お客様との信頼関係です。お悔やみがあれば駆けつけますし、親戚のようなお付き合いをしています。それは、仕事だけでなく、「お客様役に立つことは何でもしよう」という弊社の考え方によるものです。

アサヤでは、誠実でやる気があれば、専門知識がなくても、話上手でなくても仕事はできます。及川くんは愛嬌があり、お客様の話真剣に耳を傾けているので、お客様からの信頼は厚いです。一昨年から私の担当だったお客様を引き継いで頑張っています。今では中堅社員であり将来は、アサヤを背負っていく存在として期待しています。

今後は、仕事のやり方を自分なりに工夫したり、新製品を提案したりして、お客様にとって有益な情報を届けることにも力を発揮してほしいですね。



営業本部長養殖統括  
熊谷 英明 さん

## 宮城県で はたらく魅力



養殖で使うフロートは、同社で取り扱う主力商品の一つ。

### まちに活気を呼び込む 若者のパワー

東日本大震災から6年を経て、気仙沼の中心部でも徐々に新しいまちの姿が見えてきている。そうした中、及川さんは「アサヤでもまちづくりのイベントにも積極的に参加するようになったり、新卒の社員が入社したりして雰囲気も若々しくなってきたように思います」と語る。

地元住民や観光客を対象とした「しごと場あそび場 ちよいのぞき気仙沼」には、港町気仙沼の魅力を伝えることを目的に10数社が参加。毎回好評だ。同社でも普段見ることのない漁具に興味を持ってもらえるようなクイズ形式にするなどして工夫を凝らしているという。こうした「新生アサヤ」を牽引しているのが、専務取締役廣野一誠さんだ。

東京の大学を卒業し、IT企業でコンサルティングをしていたが、2014年12月に気仙沼にUターンした。廣野専務が真っ先に取り組んだのが「若手の採用」だったという。インターンシップを行ったり、就職サイトで大卒者を募集したりするよ

うにもなった。

そうした取り組みが功を奏し、17年度は新入社員6人を採用。ホームページや会社案内パンフレットもリニューアルし、外部への情報発信にも力を注ぐようになった。

### 温かさや安心感が このまちで暮らす魅力

気仙沼で働くことのも魅力について聞くと、「私はずっと地元にいるので、ほかの場所は分かりませんが、慣れ親しんだ環境で、友人や家族など気心の知れた人たちと一緒にいるので、安心感があることですね」。一時は、漠然と仙台で働くことと思ったこともあったが、震災後の悲惨な状況を見てからは、「地元のためにやらなくては」という気持ちが強くなったという。

東京で仕事をしていた経験を持つ廣野専務にも聞いてみると、「都会は働く場所と住まいが離れています。ここではほぼ一緒なのでとてもシンプル。人と人の確かなつながりが感じられて、温かさや安心感を得られるのがいいところ」と語る。

### 及川さんの オフショット

#### 風を受けて走る時の 爽快感がたまらない

小学校から高校までサッカーをしてきた及川さん。現在の趣味はバイク。「給料を貯めて3年前念願のアメリカンバイクを買いました。それが、ヤマハのドラッグスター1200。大型バイクを所有するのが夢だったそう。ドラッグスターは、バイクを自分好みに変えてカスタマイズして楽しめるのも魅力。機械いじりが大好きという及川さんが選んだ理由もそこにあるようだ。

休日にはバイク仲間と秋田や岩手方面にもツーリングに出かけるという。「自然の中を走るのはサイコーです！」と笑顔で語ってくれた。



また、仕事柄、漁業者の方の困りごとを解決したり手助けしたりすることが多いだけに、「私たちが届けたい資材によって、漁果がよければ漁業者が潤い、漁業者が潤えばまちが元気になるなど循環が目に見えることで、達成感が得られるという良さがあります」（廣野専務）。

## 支援してくれた方々に復興の姿を見せたい

気仙沼市では、中心部で土地区画整理事業が進むほか、三陸縦貫自動



営業先から戻った後は、デスクワーク。

## 後輩へのアドバイス

「気仙沼の人っていかつくて、おっかない」という人がいますが、実は明るく、とっても優しい人たちばかりです。最初は話にくいかもしれませんが、ひとたび打ち解けたら、ずっと長く続く人間関係を作ることができるのがいいところです。

アサヤも家族的な雰囲気、仕事だけでなく、趣味のことなど何でも話せます。悩んでいると相談にも乗ってもらえます。

震災をバネに気仙沼は新しく生まれ変わろうとしています。これから若い人の力が必要になるのに、圧倒的に人が足りません。だからみなさんの力を貸してください！



車道が数年のうちには開通するなどしてアクセスは飛躍的に向上するの期待されている。及川さんは「これから気仙沼市をはじめ一帯が様変わりします。そして復興が本格的になりますので、若い人の力が必要になります。ぜひ地元にとどまってもらい、みんなで力を合わせて、気仙沼を盛り上げていきたい」と語った。そして、最後にこう言って目を輝

かせた。「震災後、気仙沼は多くの方々から支援の手を差し伸べていただき、今日があります。そうしてみなさんに気仙沼がすっかりやっている姿を見てもらうのが何よりの恩返しになるのでは。それには、漁業者のみなさんが潤い、気仙沼のまちが元気になることが一番です。そのため私ができることを続けていきたいです」。



### 企業情報

## アサヤ株式会社

所在地 宮城県気仙沼市松川前13-1  
TEL: 0226-22-2800  
<http://www.asaya.co.jp/>

代表取締役社長 廣野 浩

資本金 5,000万円

設立 1948年5月（創業1850年）

従業員数 101人（2018年1月現在・子会社含む）

事業内容 漁具・船具・漁業資材・漁撈機械販売・漁撈機械修理・整備、  
油圧ホース製作、救命筏整備、船舶塗装、ロボット漁場調査、  
漁網仕立て、漁網防汚加工・染網、フロートの製造



# 頭の中で動かしただ通りに 機械が動く爽快感が最高



クライアントへ設計に関する提案をする。



## 機械好き少年、 ものづくりの世界へ

小さい頃から機械好き。車や電車を飽きずに眺めたり、少し大きくなると家電に興味を持ち中の構造を調べたりする子どもだった。迷わず工業高校へ進み、将来は旋盤やフライス盤を扱う技術者になることを思い

しばた まなぶ  
**柴田 学さん**

株式会社岩沼精工  
設計担当 2007年入社  
仙台市出身 29歳

描いた。「でも岩沼精工の求人ですべて『設計者』っていうのを見て、なぜかピンときたんですよ」と、はにかむように話す柴田学さん。インスピレーションに従って応募し、入社11年目になる現在は、産業用設備の設計を担う設計者として活躍している。

株式会社岩沼精工は、プレス加工・機械加工・板金加工のほか、省

力化機器・自動機といった産業用設備、各種金型、金属部品の設計・製作等を行う。それぞれの部門で設計から製作、据え付けまで一手に担えることや、金型と装置の両方の製作技術を持つことで、幅広い製品とメンテナンスを提供できることが強みだ。柴田さんが所属する技術課は、金型や設備・装置などの設計を担当する。

## 加工者に優しい設計を コミュニケーション力も鍵

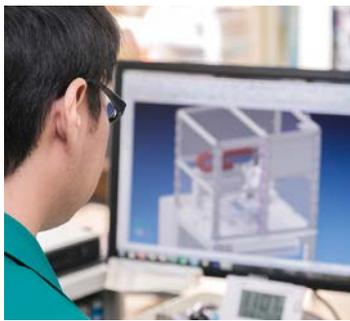
1、2年目は現場で一通りの作業を経験し、加工の仕事を覚えた。高校で専門的に学んだものの、「仕事で使う知識や技術はレベルが圧倒的に違う」と感じ、メーカーなどが開く講習会に積極的に参加して知識を増やしたそう。

その後は設計者として、まず金型の設計を担当。5年目ごろから、少しずつ産業用の装置や自動機も担当できるようになった。

心掛けているのは、「シンプルな構造」。機械好きゆえに、ともしれば疑った作りに走りたくなるが、大

切なのは「作りやすく、組み立てやすく、メンテナンスしやすい」ことだ。加工者とも打ち合わせを重ね、修正しながら使いやすい図面に仕上げている。

設計者というと黙々とパソコンに向かうイメージだが、特に産業用装置を手掛ける場合はクライアントとの打ち合わせや交渉も多い。相手の要望をいかに引き出し、仕様の考え方をすり合わせられるか、納期や予算についてどこまで踏み込んだ話ができるか、コミュニケーション力が問われる場面だ。「正直言って苦手」と打ち明けるが、「営業担当者の会話を観習って勉強します!」と成長を誓う。



3D-CADを使って、部品の立体的なイメージを作成する。

「できない」は言わない  
できる道を発想力で模索

設計の仕事の面白さを「頭の中で考えたものを形にできること」と話す柴田さん。脳内で動かした機械の仕組みを図面に落とし込み、完成品が思い通りに動いたときの爽快感は最高だそう。けれども、一連の作業がクライアントの要求とスケジュール、コストを満たさなければならぬのが、学生とプロの大きな違いだ。「お客さんの要望をすべて実現したい、でも部品の確保や日程、コスト的にどうしても難しいこともある」と柴田さん。そんなときはどうするのか。「できない、とは言いません。発想力を駆使して、最もベターな提案をします」。

即座に力強く、そう言い切れるのは、社内に脈々と受け継がれるDNAのおかげだ。「できない理由を述べるより、できる方法を考えよう」。このモットーは、入社以来繰り返し叩き込まれた精神。「だからうちの『困ったときの岩沼精工』って言われているみたいですよ」と話す表情は誇らしさに満ちている。



## 柴田さんのある日の一日

8:15 ラジオ体操  
社員全員で準備運動を行う。

8:30 朝礼

課ごとに、その日の予定の確認や進捗よく状況をチェックする。

8:40 業務開始

メールチェックし、必要に応じてクライアントへ電話連絡。加工部署へ出向いて打ち合わせなどを進める。

12:00 昼食

出勤途中にコンビニで調達する。

13:00 業務再開

設計作業を行う。

15:10 検図作業

15時の休憩の後、加工作業用の図面に記入漏れがないか手チェックする。

17:45 終業

その日の作業記録を記入し、翌日の予定を確認。

## 上司に聞く

技術力の高いホープ  
コミュニケーション力  
磨き飛躍を

入社当初からまじめな印象で、言われたことはキチンとこなすタイプでした。加工や組み立てに使う「治具」から始まり、金型、自動機などの装置と、徐々に複雑な設計を担当できるようになってきています。技術力が高く3D・CADでの設計も得意、センスも良くなってきて、まさに伸び盛り。今では、部下というよりパートナーとして私を支えてくれています。

設計者は自分の世界だけで仕事をすれば良いのではなく、クライアントや加工者、チームメンバーとの意思疎通が非常に重要です。柴田君を含めて技術者は寡黙なタイプが多いのですが、より良い製品を作るためにコミュニケーション力をさらに磨いてほしいと思っています。そうすれば、大きな案件も一人で任せられるようになるかと期待しています。



技術課課長  
勝又 顕祐 さん

## 宮城県で はたらく魅力



加工業者用の図面をもとに、担当と打合せ。

### 工場が津波被災、 4日目から総出で復旧作業

仙台市出身・在住の柴田さん。就職にあたって地元企業を選択するのは自然な流れだったそう。「地元出身の人が多く勤めているから、違和感なくスタートできるし、社風にもなじみやすかったですね」と、スムーズに社会人デビューを踏み出せたよう。

地元への思いを強烈に意識したきっかけは、入社5年目の終わりに起きた東日本大震災だった。

海岸から直線で約2キロに位置する社屋と工場は津波で被災。1.5メートルの高さまで浸水し、加工用機械は全滅した。しかし、千葉喜代志社長（当時）の復興への決断は早く、被災から4日目は連絡のついた社員が総出で片付けに取り掛かったという。

分厚く堆積した泥やがれきと、手作業で格闘する毎日。初めの頃は車で会社近くにたどり着くことができず、途中から歩いて通った。ガソリン不足も深刻で、早朝からスタンドに並び、近隣の社員は乗り合わせたそう。い

つまで泥かきしても、地面が見えてこなかった。でも、社長自ら泥まみれになっている姿を見て、頑張らないと、と気合が入りました」と振り返る。

### 地域を牽引するリーダーシップ 社員として誇りに

一方で、社内の一部では滞らせることのできない納品案件を抱えている。金型を探し出し、きれいに洗い、山形県にある他社工場へ頼み込んでプレス機を借りて製造し、震災から1カ月後には供給を再開した。

懸命な復旧作業が裏り、工業団地内で先頭を切って操業を再開することができた。しかし周囲はいまだ手付かず状態の会社も多かった。地域全体で復興することが重要と考えた同社は、近隣の企業を巻き込んでグループでの復興助成金を申請、獲得するなどリーダーシップを発揮した。これをきっかけに復興を遂げた企業もあったという。

非常時に発揮された同社の幹部や先輩社員たちの底力と団結力、行動力に、若手の柴田さんは胸を熱くし

### 柴田さんの オフショット

#### 風を切って疾走する休日 体を動かしてリフレッシュ

「アスクワークが多いので、オフは車やロードバイクで出かけます」という柴田さん。「特にロードバイクは、自由な感じと風を切って走る心地良さが最高」。

海の風景が好きで、自宅のある仙台市内から仙台空港の脇を通り、沿岸を走るコースがお気に入りだそう。3年前には「ツール・ド・東北」の女川・雄勝フォンドコースに参加。会社でも二輪部に所属し、松島まで往復80キロを走破したこともあるとか。もちろんメンテナンスは自分で。「大事に使っています」とこり。





デザイン性と回転の持続性を追求した「きのこま」。

た。「自分も早く一人前になって会社や地域に貢献したい」。そう感じたという。

## 自分を育ててくれた地元へ 貢献できる人材に

地元・岩沼市が復興への歩みを進め始めると、同社は得意分野を生かして積極的に参画した。一つは、岩沼市沿岸部復興プロジェクト「千年希望の丘」への賛同商品として開発製造した金属コマ「きのこま」。震災前まで海岸沿いの松林に自生していた「アマタケ」をモチーフにした

ものだ。もう一つは、臨空地域に建設されたメガソーラー施設の支柱と架台の製造。柴田さんも設計者として何かできないかと、ソーラーパネルを搭載した電源不要の回転式干物乾燥機「ひもの君」を手掛けた。地域のイベント等でお披露目されたことは自信につながった。

震災からの復興の過程は、柴田さんにとって設計者としての自らの成長と重なる。高い技術力を誇る岩沼

精工の一員として、社内で頼られる存在になることが、岩沼、宮城、東北の復興につながると感じている。「地元で働くことで、自分を育ててくれた故郷の役に立てるのはうれしい」。震災を目の当たりにしたこと

で、その思いはさらに強くなった。「まずは、大型設備の設計を一人で任せてもらえるだけのスキルを身につけることが目標。頑張ります」と決意を話してくれた。



## 後輩へのアドバイス

社会に出ると、学生時代のように何から何まで教えてはもらえません。でも、周りを見ればお手本にしたい先輩は必ずいます。分からないことは、自分から聞いたり相談したりするといいですよ。待っていても解決しないし、相談すれば先輩との距離も近くなるはず。

仕事を選ぶときは、自分が好きで得意なことを第一に考えるのがいいと思います。興味があることなら、大変でもやり遂げられます。僕は機械の仕事に就いて充実しているし、まだまだ成長できと思っています。就職前に不安なのは誰もが同じ。「大丈夫」と自分に言い聞かせて頑張ってください。

### 企業情報

## 株式会社岩沼精工

所在地 宮城県岩沼市下野郷大松原 305-3  
TEL: 0223-29-2121  
<http://www.iwanuma-seiko.jp/>

代表取締役社長 千葉 厚治

資本金 1,000万円

設立 1974年4月

従業員数 53人 (2018年1月現在)

事業内容 量産プレス加工、治工具全般・試作品の製作、生産設備類・金型の設計・製作



# 地元の良さを知ろう

Interview

ペンシーネクストスイッチ 代表CEO

鈴木 歩さん

[宮城県気仙沼市出身]

地元で暮らし、  
働く魅力とは何か。  
震災後、宮城県に  
Uターンした  
鈴木歩さんに  
お話をうかがいました。



2013年、カキなどの地元水産品の6次化商品ブランディングで情報発信を担当。パッケージのデザインや写真撮影、ホームページやオンラインショッピングサイトの制作などに携わった。

## 東京でのキャリアを生かし 地元への復興支援のためUターン

「宮城県に戻るまでの経緯について教えてください。」

私は原宿にある企画会社でデザイナーとして働いていました。有名ファッション雑誌とコラボした新しい雑貨の企画やパッケージデザインなどに関わっていました。

地元に戻ろうと決意したときからは、やはり震災でした。気仙沼に戻り、実家も流されて何もなくなった状況を目の当たりにしたときに、「私はこのまま東京でデザインの仕事を続けて本当によいのかな?」と思ってしまったんです。

「何でもよいから、地元で仕事を見つけて一刻も早く戻らなくては!」とはやる気持ちもありましたが、約10年間、東京で築きつつあったデザイナーとしてのキャリアを「あっさり捨てるようなことをしていいのだろうか……」という不安もありました。

そこで、東京に残ってデザインで被災地を支援するボランティア活動を続けながら、地元に戻る方法を模索することにしたんです。

2年くらい過ぎたある日、知人から「地

元唐桑でデザインの方で地域を支援するための人材を募集している」と聞きました。「これは、私のために用意された仕事なのでは? ほかの人には絶対に譲れない!」と思いつぐに応募して、地元に戻ることができました。

## 地元でデザイン会社を設立 教育活動との両立めざす

「宮城県に戻ってからはどんな仕事に携わったのでしょうか。」

地元唐桑地区にある集落で1年間、漁業に携わるみなさんと一緒にカキやホタテを扱った商品の企画販売をする事業に関わりました。

この頃の気仙沼は、工場や企業が続々と本格的な事業を再開した時期でした。そのため、商品の企画やパッケージデザインなど、気仙沼のいろいろな方からお仕事の相談をいただきました。そこで、事業終了後により多くの要望に応えられるよう、デザイン会社を立ち上げました。

その後は、デザインの仕事をしながら、小中学校でワークショップを開いて、子どもたちにデザインの魅力を伝える活動などにも関わってきました。現在は、デザインの仕事と教育活動の両方を事業展



2014年に立ち上げたデザイン会社では、宮城県内や岩手県陸前高田市の生産者から直接依頼を受け、商品の企画・デザインに関わった。

## 鈴木 歩 (すずき・あゆみ)

1980年、宮城県気仙沼市唐桑町生まれ。高校の美術科、芸術系大学を卒業後、デザイナーを目指して上京。2013年、地元NPOの事業に応募し気仙沼へUターン。2014年同NPO代表とともに独立しデザイン会社ベンシーを設立。2017年こども向けデザイン教室をスタートさせ、新たなデザイン会社設立の準備を進める。



気仙沼市内で自然体験活動を展開するNPO法人「浜わらす」と連携したワークショップの様子。同NPOの活動拠点をまとめた「基地マップづくり」を子どもたちと一緒に行った。

開するため、新しい法人の立ち上げの準備を進めているところです。

**当たり前だったものが宝物に  
離れてみて分かった地元の魅力**

**―宮城県に戻って感じた地元の魅力は何でしょうか。**

地元に戻ってみたら、中学生までは当たり前だと感じていたものが、本当はものすごく贅沢で素晴らしいことだったんだって気付きました。

お気に入りだった海辺の風景や食べ物、商品など地元にあるものの多くが、まだその魅力を外に伝えきれていない宝物でした。そして、その背景に必ず地元の人が関わっていて思いやストーリーを持っている。

たくさん物にあふれ、目まぐるしく変化するトレンドに振り回されていた東京の生活では、あまり感じる事ができなかった感覚でした。

**―東京の生活から一番変わったのはどんなことでしょうか。**

東京では、知らない間にデザインを毎日大量に生み出すことが仕事となり、疲れきってしまうことが多かった。それで

も、東京の暮らしは、消耗していたけれど幸せだと感じていたんです。

ファッション誌の仕事をしてたこともあって、常に周囲は物にあふれているので、満たされちゃうんですよね。それで幸せと錯覚する。地元に戻ってそれに気付きました。

それからは、物に対する愛着心が強くなり、物欲がすっかりなくなりました。東京で働いていた頃は、営業の方が流行りのスイーツなどを差し入れてくれましたが、今は近所のおばあちゃんお手製の「干し芋」だったり。シンプルだけど、「人の温もりが詰まったものほど、満たしてくれるものはないな」と感じています。

**「まずは地元で頑張ってみる」  
夢をあきらめないで続けてほしい**

**―地元で働く魅力について聞かせてください。**

仕事とプライベートの境界が無くなったように感じます。

東京では、仕事の時間や仕事上のお付き合いがある人とは、「仕事モード」で割り切って関わらないと、ストレスを感じていました。

でも、地元に戻ってからは、仕事でも



「地域の子もたちだけでなく、大人のみなさんにも地元の魅力を再発見していただきたい」という思いで開催した大人向けワークショップ。参加者が発見した魅力を1枚のマップにまとめた。

# 「地元で頑張る」という選択。 どんな職種であっても、 カタチにできると信じています。

プライベートでも関わる人のほとんどが顔見知り。中学生の時は、そんな狭い社会がともイヤでしたが、今は気兼ねなくお付き合いできて、いいなって思っています。

気仙沼のみなさんは、熱い方が多くて、生産者、経営者としての本気を私に直接ぶつけてきてくださいます。大事にしている思いやモノにまつわるストーリーを必死に受け止めながら、デザインに落としていく。本当の意味での「デザインによる伝え方」を今ここで学ばせていただいているので、とても楽しいですね。

—最後に地元の若者へメッセージをお願いします。

「田舎ではデザイナーにはなれないかも」。私は、そう思っただ一度地元を離れたましたが、今被災地には、東京と変わらないほどいろいろな方々にお会いできる環境があるし、東京などで経験を積んだいるんな人が戻ってきています。ここ気仙沼では、震災後クリエイティブな分野で活躍する仲間はまだまだ少ないですが、受け入れる土壌はできつつあるなと感じています。

だから「地元にいるからデザインを学べない」という理由で、クリエイティブ

な仕事に就く夢を諦めてしまつのはもったいないと思います。「地元で頑張る」という選択をしても、これからは自分の行動次第でカタチにできるはずだと信じています。

震災後、地元に戻ってデザインの仕事ができるのは、どんな時でも、デザインをやり続けたということに尽きます。「自分にはセンスがないんじゃないか」と悩んでも、「デザインの仕事がなく不安になっても、「デザイン」と関わり続けよう」と努力は絶対にやめませんでした。みなさんにも、やり続ける気持ちを大切にしてほしいですね。



デザイナーになる夢を実現するため、高校生から地元を離れることを反対しなかった両親について、「いつも背中を押してもらっていて、本当にありがたかったです」と鈴木さんは話してくれた。「地元の慣れ親しんだコミュニティや文化も、理解を深めるほど未知のストーリーがたくさん見つかります。その驚きを感じられることも、地元で暮らす魅力の一つですね」。

# 都会と地方の違い

東北大学大学院 経済学研究科 教授

吉田 浩



都会と地方の違いについて、一概に優劣をつけられるものではありませんが、さまざまな調査結果の数字から地域ごとの特性を見ることは可能です。

例えば、平成27年に行われた国勢調査（総務省の結果を見ると、生活に欠かせない衣・食・住の「住まい」についてみただけでも、持ち家比率については、東北では全国2位の秋田県78・0%を筆頭に、岩手県が68・7%、福島県が66・1%、宮城県が58・8%と、東北地方は全般的に持ち家比率が高くなっています。ちなみに東京都が47・7%と半数以下であることを考えると、かなり高い比率といえるかもしれません。

また、「働く」ということを考えた場合、雇用者総数に対する正規職員・従業員の比率、いわゆる正規雇用者比率も、山形県の70・8%を筆頭に、福島県が68・7%、岩手県が67・3%、宮城県が66・3%と、東北地方では正規雇用者比率が高くなっています。

このように、一つひとつの項目を見ていくと、ほかの都道府県と比べて、岩手県と福島県は「食料自給率」が高かったり、宮城県は「事業所新設率」が高かったりと、それぞれ特徴があるのです。

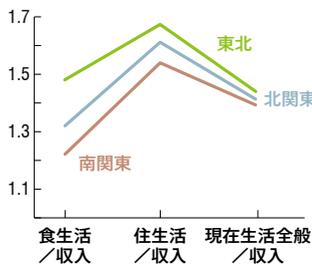
そこで一つの目安となるのが、現在の暮らしに対する満足度です。

平成29年に内閣府が行った「国民生活に関する世論調査」の、現在の生活に対する満足度調査から、「所得収入」、「食生活」、「住生活」、「現在の生活」の満足度を、東北地方、北関東、南関東の地域で比較してみました。その結果、東北地方は「所得収入」に対する満足度は低いものの、「食生活」、「住生活」において満足度が高くなっています。（表1）

東北地方は関東圏よりも食生活に対する満足度が高く、先述の持ち家率も高く、住生活にも満足している人が多いようです。

一方、現在の生活についての満足度は南関東が高くなっていますが、「所得収入」の満足度を基準として「食生活」、「住生活」、「現在の生活」の満足度を比較すると、実は東北地方は現在の生活に対する満足度も高くなるのです。（グラフ1）

現在は新幹線や高速道路が整備され、例えば仙台から東京までは新幹線で約1時間半と日帰り圏内です。首都圏へのアクセスの利便性も高く、豊かな自然に囲まれて、新鮮な食材が関東圏より安く購入でき、関東圏よりは広い家に住めるということを考えれば、東北で働き、東北で暮らすという選択肢も「まんざらではない」のではないのでしょうか。



	a	b	c	d	e	b/a	c/a	e/a
北海道	46.1	24.0	84.1	59.4	70.8	1.302	1.824	1.536
東北	49.7	29.5	82.6	58.0	70.9	1.484	1.662	1.427
北関東	49.7	26.3	81.1	61.3	70.3	1.323	1.632	1.414
南関東	53.5	26.0	82.5	65.9	75.0	1.215	1.542	1.402

（表1）国民生活に関する世論調査（内閣府調査）「満足・まあ満足」と答えた人の比率

調査対象： 全国の日本国籍を有する18歳以上の者10,000人  
有効回収数6,319人（回収率63.2%）  
調査期間： 平成29年6月15日～7月2日

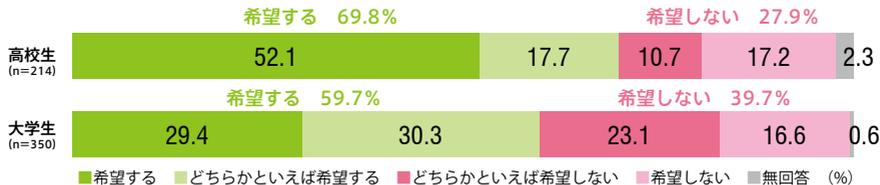
# 被災3県の高校生・大学生の就職に関するアンケート

平成29年12月に岩手・宮城・福島の高中生（水産系を中心）・大学生に対して、就職に関するアンケートを行いました。3県の学生の地元就職に対する考え方を見てみましょう。

※被災3県高校生214名・大学生350名の回答から（2017.12 被災地における高校生・大学生・保護者の就職に関する調査）

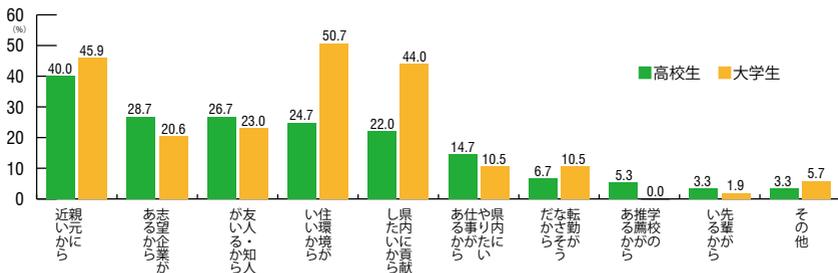
## ■ 県内への就職希望について

県内への就職希望者は、「希望する」「どちらかといえば希望する」と回答した「希望する」学生が、高校生では約7割、大学生では約6割と、いずれも半数以上が県内就職を希望しています。



## ■ 県内就職を希望する理由

県内への就職希望理由は、高校生が「親元に近いから」が最も多く、大学生では「住環境がいいから」「親元に近いから」「県内に貢献したいから」などとなっています。



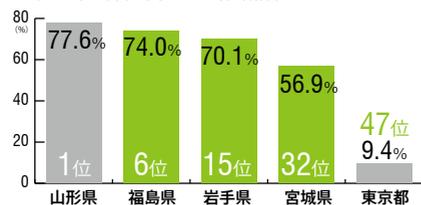
## 数字で見る3県の特徴

首都圏と東北各地の違いは、暮らしにかかわるさまざまな数字からも見ることができます。国が行ったさまざまな調査結果から都会と地方の違いを見てみましょう。

### 通勤手段

通勤方法は、東京都では鉄道・電車の利用が最も多く、東北地方は山形県の1位を筆頭に、自家用車で通勤・通学している人が多いのが特徴です。

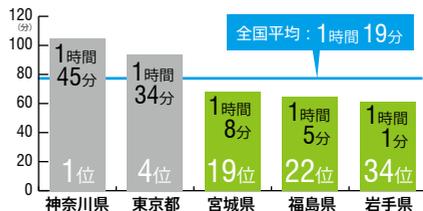
通勤・通学で自家用車だけの利用割合



※平成22年国勢調査より

### 通勤時間

1位の神奈川県に続いてるのが埼玉県、千葉県と、1日あたりの通勤時間が長いのが首都圏の特徴です。

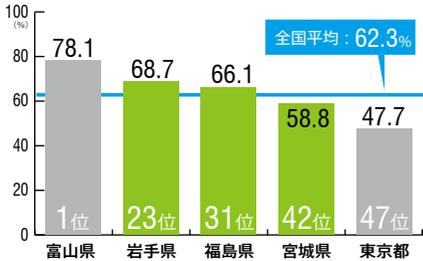


※1日あたりの通勤・通学時間(10歳以上の「通勤・通学」をしている人、平日の平均) 平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 住まいについて

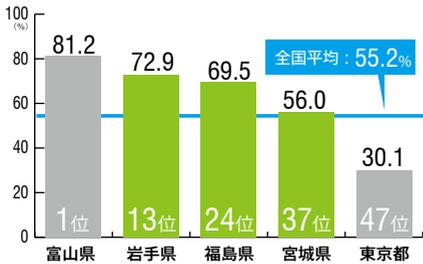
東北地方は、持ち家の比率が高く、岩手県、福島県では全国平均を上回っています。そのうち、一戸建ての住まいに住んでいる人が多いのも特徴です。

### 持ち家比率



※平成27年国勢調査

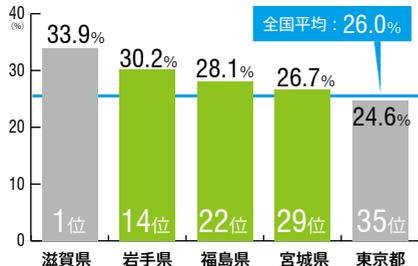
### 持ち家のうち一戸建ての割合



※平成27年国勢調査

## ボランティア

東日本大震災を経験しているだけに、ボランティア活動に熱心なのも東北地方の特徴で、岩手県・宮城県・福島県ともに全国平均を上回っています。



※過去1年間にボランティア活動をした人の割合(10歳以上)  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 帰宅時間

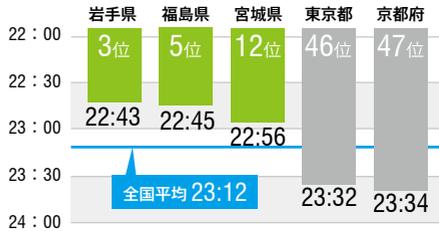
東京都では、通勤時間や就業後に立ち寄るスポットが多いせいか、帰宅時間は19:13と、遅くなっています。



※有業者の平日における平均帰宅時刻  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 就寝時間

東京都の平均就寝時刻は全国平均よりも遅く、岩手県、福島県では、全国平均よりも早寝の人が多ようです。



※10歳以上の男女の平日における平均就寝時刻  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 睡眠時間

一日の睡眠時間の長さは、秋田県の1位を筆頭に、岩手県・宮城県・福島県ともに全国平均を上回っています。大都市圏に比べてゆっくり寝ているようです。



※1日あたりの睡眠時間(10歳以上、土日を含む週全体の平均)  
平成28年度社会生活基本調査結果(総務省統計局)

## 地元企業に目を向けよう

企業のさまざまな情報は、大手就職サイトなどで見ることができる。一方、企業を選ぶ学生も、そうした就職サイトに名を連ねる大手企業や首都圏企業に注目しがち。

しかし、そのようなサイトに掲載されていなくとも、仕事の魅力はもちろん、職場環境の改善や地域密着、社会貢献など、さまざまな取り組みを行っている多くの魅力的な企業が、地元にもたくさんある。一方でそうした地元の企業は、あまり学生に知られることなく、人材の確保に悩んでいる。

豊かな自然に囲まれて、これまでの住み慣れた環境で、家族と共に暮らしながら地元の魅力的な企業で働くことも選択肢の一つ。

まずは、地元企業に目を向けてみよう。

問い合わせ先

---

**復興庁企業連携推進室**

TEL 03-6328-0267

mail kigyo-rs@cas.go.jp

---



ジモト  
で 宮城県版  
はたらく



Reconstruction Agency

新たなステージ 復興・創生へ